研究室紹介

宮崎県総合農業試験場 茶業支場

宮崎県の茶の栽培面積は 1,230 ha（令和 4 年農林水産統計）で全国第 6 位です。県内では煎茶を中心に生産されていますが，全国的にも希有な釜炒り茶の産地であるほか，近年では紅茶，烏龍茶等の発酵系のお茶づくりにも力を入れています。

宮崎県総合農業試験場茶業支場は，大正 2 年に当時の農事試験場茶業部として茶の研究が本格的に開始され，昭和 4 年に川南分場として現在の宮崎県児湯郡川南町に移転しました。そして，昭和 58 年の機構改革により総合農業試験場茶業支場として改編され，本日に至っています。敷地面積は 12.7 ha，うち茶園面積 6.0 ha と研究機関としては国内有数の試験圃場を有しています。

当支場は，総合農業試験場の 15 ある部門の一つとして，育種科，栽培加工科の二つの科の研究体制で 6 名の研究員が配置されており，育種・栽培・加工の 3 部門で，県内茶農家の所得向上につなげるための試験研究を行っています。

今回は，育種部門，栽培部門での植物防疫に関する主な取り組みを紹介します。

1　育種部門

育種部門では，1958 年（昭和 33 年）から始まった国の指定試験事業などにより，これまでに 15 品種を育成していますが，2011 年（平成 23 年）に指定試験事業が廃止されたことから，それ以降は県単事業で育種を継続しています。

現在の育種目標は「煎茶や釜炒り茶だけでなく，新香味茶としても品質が高い品種の育成」と「超多収で耐病虫性のドリンク向け品種の育成」として選抜を行っています。しかし，本県は温暖で降水量が多く，病害や難防除害虫が発生しやすい条件下で茶が栽培されているため，主要病害虫に対する抵抗性を明らかにすることが品種を育成するうえで特に重要となります。

育成したクワシロカイガラムシ抵抗性品種（左）と感受性品種（右）

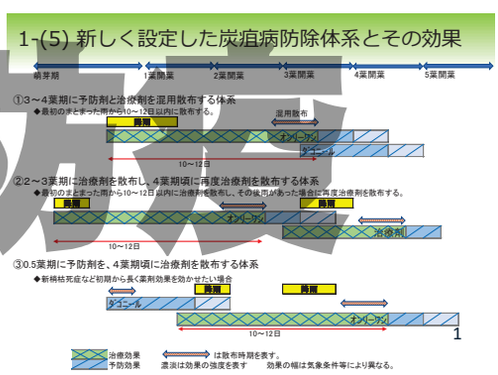
そこで，山間地では重要な病害であるものの平坦地では発生がほとんど見られないために抵抗性の評価が難しい「もち病」や，樹幹に寄生しているために薬剤がかかりにくく難防除害虫となっている「クワシロカイガラムシ」に対する抵抗性検定法を確立し，抵抗性品種育成の効率化を図ってきました。

これからも，上記に加えて，炭疽病や輪斑病等の抵抗性検定を行うとともに，各種病虫害抵抗性の検定法を開発しながら，高品質な耐病虫性品種の育成を図っていきたいと考えています。

2　栽培部門

（1）　茶の秋芽生育期の炭疽病防除法の改善

近年，秋期の長雨などにより，慣行防除を行っていても炭疽病が多発する事例が多く見られることから，防除法の見直しを行いました。各種の試験を行い，三つの防除体系を設定し，防除効果を見える化した資料を作成しました。



作成した炭疽病防除資料

（2）　物理的防除技術を活用した輸出対応型 IPM 体系の開発

茶の輸出拡大を図るためには，農薬残留に留意したうえで病害虫の発生を抑えることが重要です。クワシロカイガラムシについては，当支場において 2007 年にスプリンクラー散水による防除技術を開発したところです。しかし，さらなる散水量の低減が必要であることから，国の「国際競争力強化技術開発プロジェクト」に参画し，発生消長を詳細に調査することで，積算温度を用いた散水適期の予測法の開発に取り組んでいます。

（3）　有機栽培対応型 IPM 体系の開発と導入

無農薬栽培を行ううえでは，チャノミドリヒメヨコバイの被害軽減が重要な課題であるため，国の「戦略的スマート農業技術等の開発・改良」に参画し，耕種的防除法を用いた本種の防除法の開発に取り組んでいます。

（栽培加工科長　川越洋二）

〒 889-1301　宮崎県児湯郡川南町大字川南 17070
TEL　0983-27-0355

植物防疫